



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 翻訳序文に見る明治の英文学翻訳と英文学研究                                                             |
| Author(s)        | 佐藤, 美希                                                                            |
| Citation         | Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集, 2, 72-84                                       |
| Issue Date       | 2006-03-10                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/35550">https://hdl.handle.net/2115/35550</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 2_p72-84sato.pdf                                                                  |



## 【研究ノート】

### 翻訳序文に見る明治の英文学翻訳と英文学研究

佐藤 美希

#### 1. はじめに

本研究ノートでは、明治期の英文学翻訳に付された序文の分析を中心に、明治の英文学翻訳と、それを規定する社会・文化的コンテクストの変化をたどることを試みる。

この「社会・文化的コンテクスト」として本稿で設定するのは、英文学を日本の文化が受容する上で主導的な役割を果たしたと考えられる「英文学研究」である。これが明治期に一種の制度として発展していくのは、明治 20 (1887) 年に東京帝国大学の文科大学に英文科が設立されたのが公的な出発点であると一応言うことができるが<sup>1</sup>、それ以前の明治 8 (1875) 年には既に東京開成学校（後の東京帝大）でシェイクスピアを中心とした英文学が外国人講師によって講義されていた<sup>2</sup>。この講義のもとで坪内逍遙ら日本の英文学研究の先達が生まれる。一方この明治 8 年という年は、仮名垣魯文が明治期初の本格的な英文学作品の翻訳『葉武列士』の発表を試みた年でもあり<sup>3</sup>、日本がその後膨大な数の英文学を翻訳し続ける歴史はここから始まったとも言える。つまり、その後の英文学研究と英文学翻訳は、この明治 8 年を契機に、ともに並行して発展したと考えられる。

その並行性を検討するために、本稿では、翻訳者がどのような目的を持って英文学を翻訳したかについて言及している翻訳序文を考察することとしたい。そもそも当時の英文学の発展を牽引してきたのは、英語を読むことができ、その英語原文を日本の読者に提供しようとする意図を持つ知識人や知的エリート達である。翻訳序文には、彼らがどのように英文学を捉え、彼らの翻訳への考え方やいかなるストラテジーを取っているかが明記されている。それらを考察することで、英文学翻訳と英文学研究の並行性、さらにはより高次の社会・文化的背景との関連を証明することができるはずである。

以上の観点から、この研究ノートでは、本格的な研究の前段期（明治 10 年前後～20 年前後）にあたる明治前半と、研究の胎動期（明治 20 年以降）にあたる明治後半とを区分し、翻訳の序文を中心的な題材にして英文学翻訳の諸相を抽出しながら、それと明治時代の英文学研究や社会・文化的背景との関係を通時的に考察していく。

なお、現在文献として入手困難となっている明治期の翻訳については、川戸・榊原編『シェイクスピア翻訳文学書全集』、同『明治翻訳文学書全集』にほぼ網羅されている。本研究ノートにおいても、オリジナルが入手困難なものについてはこれらの研究

集成に掲載されているものを参照した。

## 2. 序文に表れる明治の翻訳観と英文学観

### (1). 明治前半(～明治20年以前)

まず明治8(1875)年の仮名垣魯文訳『葉武列土』から見ていきたい。これは厳密には「翻訳」と言うよりはシェイクスピアの *Hamlet* を題材とした「翻案」と言うべきもので、魯文が創刊と記事の執筆に携わっていた『平仮名絵入新聞』に連載された。明治のシェイクスピアの翻訳としてはおそらくこれが最初のものになるが、残念ながらこの連載は不評のため僅か三回で打ちきりになる。このとき魯文は「未だ時好に適はず<sup>4</sup>」と述べ、まだ英文学が受容される土壌が整っていないことを認めている。その11年後の明治19年に再び *Hamlet* を翻訳(翻案)した『葉武列土倭錦絵』の序で、魯文はその時の経緯を次のように書いている。

當時の看客未だ西洋小説の微意有を味ふ者なく闇雲に面白からずとして頗る不評なりしかば斷然續稿を廢し次号の記載を見合し・・・<sup>5</sup>

明治8年当時は、有名な魯文の『安愚楽鍋』(明4)に書かれているように、文明開化といっても中村正直訳『西国立志編』のような実学重視で、未だ西洋文学の「微意」を鑑賞するような段階には至っていなかったのだろう。明治8年というのは、前述したように、東京開成学校の外国人講師サマーズによって初めてシェイクスピアが講義された年である<sup>6</sup>。ようやく知識人の卵達に英文学とはどのようなものかが伝えられたばかりの時に、一般読者に英文学の「微意有を味ふ」ことを求めるのは確かに「時好に適は」なかったのかもしれない。

しかし、英文学のキャノンである *Hamlet* の本邦初の翻訳を行ったのが仮名垣魯文だったことは、次の二点において注目に値する。一点目は、当時、西洋の文献の多くは英学者や政府の留学経験者を中心とする(例えば明六社<sup>7</sup>)知的エリートによって紹介されていた状況で、学者でもエリートでもない、大衆のエンターテインメントを担う戯作者かつ数種類の新聞の刊行に携わるジャーナリストでもあった魯文が翻訳したという点である。二点目は、魯文が知的エリートのためではなく、市井の読者に英文学を提供しようとしたという点である。前田愛によれば、政論を中心記事とした明治初期の大新聞はフリガナのない漢文調で書かれていたため、一般民衆が疎外されていた。それに対し、『葉武列土』を連載した「平仮名絵入新聞」は平易な文章だったために一

般大衆に親しまれていた<sup>8</sup>。つまり、知的エリート達が英文学の受容をリードするようになる後の状況（後述）とは異なり、英文学受容の出発点はあくまで一般読者であったということだ。

ただ残念ながら、「エリートによるエリートのため」ではない英文学の翻訳は、明治8年の段階では読者に受け入れられず、翻訳としては成功しなかった。しかし見方を変えれば、英文学研究や翻訳がエリート達によって発展される以前の段階で、既に一般読者による英文学と翻訳への評価が示されており、さらにこの評価がその後に採用される翻訳ストラテジーにつながると考えることはできないだろうか。

明治19年の改訳『葉武列士倭錦絵』が8年の『葉武列士』とは異なる翻訳ストラテジーを採っているのは、『葉武列士』の評判を鑑みたものだろう。つまり、『葉武列士』は、体裁は筋書体で登場人物の名前も漢字で書かれていながらも原文の音を踏襲した翻訳であり、ある意味中途半端に日本化した翻案になっている。明治19年の『倭錦絵』の方は、体裁が筋書体から院本調に変更されただけではなく、名前も日本風、台詞の七五調も前作より強調され、さらに歌舞伎や浄瑠璃を彷彿とさせる美辞麗句も増え、まさに日本の芝居になっている。そして、詳細については後述するが、この19年のストラテジーは当時の他の翻訳のそれと酷似している。8年の翻訳が良しとされなかったことが、19年に見られる翻訳ストラテジーの変化を生み出したと言えるだろう。

ではここで、魯文が改訳の『倭錦絵』を発表した明治19年前後の翻訳状況を考察する。まず『倭錦絵』の序文を再度見てみたい。この序文で魯文は「文章は繰曲浄りの院本調に倣ひ近松門左衛門が句調」と述べ、既存の浄瑠璃の形式でシェイクスピアを訳出すると明言している。上述した明治8年の不評を踏まえた翻訳ストラテジーの変更であろうが、この序文が興味深いのは次の点においてである。

魯文はこの序文に「改良演劇の筋書」と題を付け、序文の中でも「目下劇場の改良説隆むとなり既に新劇場建築落成の上はこの葉武列士傳を我國風に模し新舞臺に演ずる<sup>9</sup>」と書き、この戯曲の翻訳が歌舞伎や浄瑠璃といった日本式の演劇の改良につながると考えている。しかしそれにもかかわらず、この戯曲を「我國風」の芝居である「院本調に倣」って訳出しようという矛盾があるのである。つまり、魯文は西洋の名作のエッセンスを取り入れることで、形式は純日本風のものであっても「改良演劇」になると考えて『葉武列士倭錦絵』を翻訳しているのである。実際、明治19年には演劇改良会が発足し、従来の演劇を変えようという意気込みが強い時期であったが、その実、どのように改良するかは極めて曖昧だったようだ<sup>10</sup>。『倭錦絵』の矛盾もこの曖昧さを示してはいるが、それでも尚、魯文の翻訳態度にはこの翻訳が日本の演劇の改良であ

り日本文化にとって有益であるという信念と、その有益さを享受するためには、明治 8 年に自ら翻訳して受け入れられなかった体裁ではなく、純粋に日本的な形式を踏襲することを意図的に選択したことが読みとれる点で、注目に値する。

次に、同年出版された宇田川文海の手になる『何桜彼桜銭世中』(*The Merchant of Venice* の翻案)も見てみよう。この作品は前年の明治 18 年に大阪朝日新聞に連載、同年に上演もされている。この序文の中で、「精神は沙翁に奪ひ文章は柳亭に假り心體共に個人の糟粕を嘗めたるものなる・・・」と書かれている。題字にも「趣向は沙士比阿の肉一斤<sup>11</sup> 文章は柳亭種彦の正本<sup>12</sup>製」と掲げられている。内容は *The Merchant of Venice* でありながら、正本仕立てに翻訳され、舞台はヴェニスから東京に、固有名詞は全て日本名に、挿し絵は完全に江戸の武家・町人の姿を描いており、言うまでもなく『倭錦絵』とこの翻訳のコンセプトは類似している。これが上演されたとき、「世の喝采を博」したという。川戸 (2004) の引用によれば、観客であった関根黙庵は「(この脚本は) 舶来種とは思へぬ位 (中略) 筋がよく通って面白い (中略) 兎に角日本の『ヴェニスの商人』として、非常に感興を起させた芝居であった」<sup>13</sup>と感想を述べている。完全に正本仕立ての日本風にしたことで、「日本人が楽しめる『ヴェニスの商人』」になっていることが好評の要因になっていることがわかる。

同時代の翻訳序文をもう一つ見ておきたい。坪内逍遙の手になる明治 17 年の『自由太刀餘波鋭鋒』(*Julius Caesar* の翻訳)の「附言」である。逍遙は東京開成学校でホートンによる本格的な英文学講義を受けたエリート知識人である。また、後にはシェイクスピア全作品の翻訳を試みたシェイクスピア研究者の先駆けである。英文学研究者としての初期の頃の翻訳であるこの『自由太刀』で、逍遙は次のように自らの翻訳への態度を語っている。

原本は (中略) [日本の] 院本とは全く體裁を異にしたる者なるを今此國の人の為にわざと院本體に譯せしかば、原本と比べ見ば或は不都合の廉多あるべし 見んひとこれを諒せよ 全文意味の通し易きを專要とし淨留理にてそめ易き所は之にしたがひ臺辭にして解し易き所も又之に従ふ 蓋し原本乃意を失はざらんを力むるのみ (中略) 原本の意は成るべく失はざらんを力むるといへども中には彼我思想の異なるままにいかやうにも譯しかたき條なきにあらず、それらは譯者の意匠をもてことさらに取捨しまたは骨を換へたるもあり (後略)

逍遙の翻訳態度は非常に明快である。第一は、逍遙が考える日本人にとっての戯曲

形式とは院本であり、日本人読者がわかりやすいように西洋の戯曲の形式ではなく日本の形式に倣ったということである。第二に、逍遙は意味が分かりやすいことと、原文の内容を失わないことを重視した。院本の形式に倣ったことや、「彼我思想の異なるままにいかやうにも譯しかたき條なきにあらず、それらは譯者の意匠をもてことさらに取捨し又は骨を換へたるもあり」という態度は、宇田川や魯文の翻訳態度と酷似している。

上述の通り、逍遙は日本における初期の英文学講義を受けて自らも英文学研究者になった。その彼が宇田川や魯文と同様の翻訳を行ったというのは着目すべき点である。宇田川や魯文は戯作者・ジャーナリストであり、彼らの翻訳を新聞に連載したことからわかるように、芝居の改良・成功・新規さを念頭に置いた一般読者のエンターテインメントとしてシェイクスピアを翻訳紹介している。『葉武列土』の考察でも述べたように、英文学が一般読者を対象とするあり方であれば、明治8年に拒否されたストラテジーではない新たなやり方で読者を満足させる方法が考えられるはずである。宇田川や魯文の翻訳はまさにこのことを体現している。

しかし、逍遙は彼らとは事情が異なる。遡って明治10年、逍遙が在籍していた東京開成学校は東京大学と改称され、同大の英語教師サマーズの後任としてホートンが着任した。彼の講義はシェイクスピアの作品解釈や劇中人物の性格解釈といった緻密な読解を求める、本格的な英文学講義であった<sup>14</sup>。ホートンは明治10年から15年まで東京大学で教壇に立ち、前任者のサマーズもその間札幌農学校をはじめとする地方の学校でシェイクスピアを講じている。いわゆるエリート達にシェイクスピアをはじめとする英文学が講義され、その制度的な英文学教育の中で逍遙は学んでいたのである。逍遙は東京大学卒業後、明治15年に東京専門学校（後の早稲田大学）で英文学を教え始めた。明治19年に東京大学は東京帝国大学と改称され、20年には東京帝大の文科大学に英文科が設立され、名実ともに「英文学研究」が出発点を迎える。23年には逍遙が東京専門学校の文学科設立の中心人物となる。

このように、逍遙は英文学が研究として発展し始める10年あまりの間に、ホートンの授業を受けて原文を正確に深く解釈する態度を学んで研究者としての初期の経歴を積む。しかし、その逍遙が宇田川や魯文に先駆けて、日本人読者に馴染みやすいことを目的に院本調で翻訳しているのである。

ここで考えられることは、当時の学究的な英文学から生み出された逍遙の翻訳であっても、魯文や宇田川の翻訳のように一般読者が英文学を受け入れることのできる現状を踏まえているという点で、両者の翻訳は何ら変わりがないということである。言い換えれば、英文学研究が胎動してきたことは間違いがないが、英文学の翻訳はそれ

によって牽引されているのではなく、むしろ全く逆で、一般読者の現状に合わせたエンターテインメント的な翻訳態度に英文学が牽引されていたのではないか。

このことを検討するために、この 10 年あまりの英文学の翻訳状況を見ておきたい。明治 8 年には魯文の翻訳など見向きもされなかったが、11 年以降リットンやディズレーリの政治小説が相次いで翻訳され、明治 20 年頃まで一種の翻訳小説ブームになる<sup>15</sup>。吉武（1968）や Kondo and Wakabayashi (1998) に指摘されているように<sup>16</sup>、この時期の翻訳は日本の読者にわかりやすいように大胆な翻案や自由訳がほとんどであった。明治 8 年に魯文が行った少々中途半端な日本化では読者に受け入れられなかったことを考えれば、西洋文化に全く馴染みのない日本人読者の為には大胆な自由訳（吉武は「濫訳」と呼んでいる）は真つ当な翻訳ストラテジーで、実際ずいぶんと人気を博したようである。吉武によると、逍遙はこの流れの中で、自分が学生時代夢中になって読んでいたスコットやリットンの小説の翻訳を明治 13 年と 17 年に三編出版している<sup>17</sup>（13 年当時、逍遙はまだ東京大学の学生だった）。逍遙は後の翻訳論「自分の翻訳に就いて」で「最初は出来心の自由訳」をしていたと書いている<sup>18</sup>。おそらく、英文学を学術的に学んだと言っても、当時の自由訳ブームの流れの中では、彼が学生時代夢中になっていた小説のおもしろさを読者に伝えるためには、彼もまた自由訳のストラテジー以外考えられなかったのだろう。

このように見れば、逍遙のような気鋭の文学者の翻訳であっても、魯文や宇田川の翻訳が示しているような一般読者による英文学・翻訳への興味や評価を重視する、画一的な翻訳状況の時期だったのかもしれない<sup>19</sup>。

しかし、このような自由訳の翻訳小説がブームとなっていた明治 18 年、この画一的に思われる翻訳状況に変化が表れる。リットンの *Kenelm Chillingly* の翻訳『繫思談』の緒言で初めて、原文の内容だけを取り入れることを重視した換骨奪胎の翻訳でしかあり得なかったこれまでの自由訳が批判され、逐語訳の重要性が主張されるのである。

・・・論ヲ待タザル二世ノ訳家多クハ其構案ノミヲ取りテ之ヲ表発スルノ文辞ニ於テハ絶テ心ヲ用ヅルナク全ク原文ノ真相ヲ失フモ肯テ顧ミザル（中略）一種ノ訳文体ヲ創意シ語格ノ許サン限りハ務メテ原文ノ形貌面目ヲ存センヲ期シ・・・<sup>20</sup>

このように強力に自由訳が批判されても、その後も『倭錦絵』『何桜』をはじめとする大胆な自由訳がなくなるわけではない。しかし、後述する「翻訳王」と呼ばれた森田思軒もまた逐語訳を主張したように（明治 21 年「翻訳の心得」）、少なくとも自由

訳一辺倒の画一的でしかなかった翻訳状況は変化したのである。

この後自由訳と逐語訳をめぐる二項対立の翻訳観がかまびすしく論じられることになるのだが、その議論を通じて多様な翻訳観が生まれ、まさに福沢諭吉が述べたように、翻訳の「多事争論」から日本の翻訳が発展することにつながる。換言すれば、学究的なものもそうでないものも画一的な翻訳しかない状況では、翻訳の状況は進化しない。その意味で、『繫思談』の緒言は非常に重要な転換点になったのである<sup>21</sup>。

以上のように、英文学の翻訳状況は明治 20 年前後になって、画一的な翻訳状況から複数の翻訳観が共存するようになり、翻訳に対する考え方を深化させていける土壌を獲た。英文学においても、英文学がエリート教育の中で学究的に実践され始め、逍遙らを輩出していることは英文学研究の黎明であることに間違いはない。しかし、英文学の翻訳は、この黎明期の学究的な研究が発展した過程の産物というよりは、一般読者がわかりやすいこと、楽しめることを求めるエンターテインメントに供する形で、彼らの興味や評価軸の中で存在していたのであり、私が 1 章で述べたような英文学研究と翻訳おける並行的な関連はまだ見られていないと言うべきだろう。

言い換えれば、明治前半はかなり大胆な自由訳を通じて、英文学の翻訳が英文学研究に先行して日本の文化の中に英文学を受け入れる土壌を作ったと言えないだろうか。

## （２）明治後期（明治 20 年～）

前節でまとめたように、明治 20 年までの翻訳をめぐる状況は、自由訳と逐語訳という複数の翻訳態度が共存できる状況になっていた。両者の共存によって、翻訳とはいかにするべきか、いかに英文学を日本に移入すべきかを考える観点が多様化し、翻訳状況の発展につながろうとする段階だったということができる。

では、明治 20 年以降は翻訳をめぐる状況はどのように変化するのだろうか。明治 21 年、「翻訳王」と呼ばれた森田思軒がいわゆる「精密訳」と呼ばれる翻訳態度を主張する。

（略）原文に、「心に印す」とあらば、直ちに「心に印す」と翻訳し渡し。其事恰も「肝に銘ず」と相符すればとて、「肝に銘ず」とは翻訳す可からず。原文の俚「心に印す」と書かば、ただ原文の「肝に銘ず」の事を伝ゆるのみならず、西洋人は我の「肝に銘ず」の場合に於ては「心に印す」と言ふなりと其の意趣をも伝へ得るなり。<sup>22</sup>（下線佐藤）

森田の主張で重要なのは、西洋人が有る事柄について言うその言い方までも日本人の読者に忠実に示すべきだという考え方で、『繫思談』緒言に書かれた翻訳論を踏襲したものである。森田思軒は慶応義塾大阪分校を卒業したジャーナリストであり、英文学研究に造詣の深い人物ではない。しかし、ジャーナリストだけではなく様々な小説を翻訳した知識人であり、仮名垣魯文などと並ぶ、明治の英文学研究確立前段期の外国文学移入と翻訳状況の発展にとっては重要な人物である。その森田がこのような忠実な逐語訳を明確に主張したとあれば、その影響力はかなりのものだったと推測される。

では、これと同時期の翻訳序文にはどのようなことが書かれているだろうか。先に『何桜』や『倭錦絵』といったシェイクスピアの翻訳序文を概観したので、ここでも *The Merchant of Venice* の翻訳の一つである明治 24 年の『人肉質入裁判法廷之場講義録』を見てみたい。この翻訳は有名な裁判の場面のみを採り上げてその英語原文と日本語訳を掲載し、さらに注釈を付したものである。訳者は国民英学会主幹の磯辺弥一郎。国民英学会は実用英語と英文学を教える目的で明治 21 年に磯辺によって創設された私立の英語学校で<sup>23</sup>、東京帝国大や慶應義塾と並び称されるほどに日本の英学の発展にとって重要な学校だったようである。

磯辺の「緒言」の中で、注目に値する項目を要約すると以下ようになる。（下線は筆者による）

- ・最近日本で英文学が行われるようになったのは国家にとっては喜ばしい。
- ・英文学は高尚で純潔な思想を表しているので、日本人がそれに触れれば感化され、これまでに東洋にはない新しい文学が見られるようになるだろう。
- ・英文学を志す若者で学校に通えない者のために、彼らの独習の助けとなることを目的とする。
- ・シェイクスピアの戯曲は難解であるため、イギリスの英文学大家による評論や注釈に数多くあたり、参照した。また、日本における英文学の大家である井上十吉にも校閲を頼んだ。
- ・独学者が一読して明確にわかることが肝要なので、原文をありのままに訳し、原文の文勢や語勢を留めるようにした。

この磯辺の「緒言」には三点の特徴がある。まず第一に「英文学の思想は日本人が目指すべき高尚な思想だから、国家のためになるものだ」というイデオロギー的な思想が読み取れる。それだけではなく、この翻訳は教育制度に組み込まれていない独学

の学生にこの高尚な思想を理解してもらう手段でもある。つまり、磯辺は英文学を国家の思想を発展させるための重要なイデオロギー装置として用いている。

第二に、本場イギリスの英文学者の研究成果を数多く参照し、原文の理解に努めるというのは、典型的な英文学の研究姿勢である。つまり、正確且つ緻密な英文学研究の姿勢を体現している。また、日本の著名な専門家の名前を冠しているのも、この研究の権威を高めるといって非常に制度的な方法と言える。

そして最後に、明治前半までの主流であった自由訳とは全く異なる、「原文をありのままに訳して原文の意をとる」という翻訳態度が見られることである。正確に英文学を理解し、そこに書かれているままに理解しようとする態度は、上述の森田思軒の翻訳観に類似する。そしてこの翻訳観は同時に大学や学校で行われるようになっていく英文学研究の態度と共鳴している。明治 20 年に東京帝大英文科、21 年に国民英学会、23 年に東京専門学校英文科、26 年には雑誌『文学界』の創刊、28 年東京高等師範英語科、29 年正則英語学校、30 年東京外国語学校英語科と、英語・英文学の教育・研究がますます確立していく状況において、磯辺の英文学観、翻訳観はその後の英文学研究に対する姿勢を示していると言えるだろう。

次に、同じ *The Merchant of Venice* の翻訳の序文を二つ見ていくことにする。まず、明治 24 年の『講義録』から少々時間をおいてしまうが、明治 36 年に土肥春曙による『ぜ、マーチャント、オブ、ヴェニス』がある。これはやはり有名な法廷の場のみの翻訳であり、当時大人気の芝居一座であった川上音二郎一座の上演のために書かれている。翻訳者の土肥は、東京専門学校文学科の第一期生であり、学校という制度の中で英文学の学問的教育を受けた人物である。

その「はしがき」には以下のように書かれている。

(・・・) 人物の名稱、出入、問答の順序などを、殆んど原作の儘に随ひたるほかは、事件は我國の今日の人情に筋まるやう、臺詞は耳遠い直譯振にならぬやう、素人にも演じ易きやう、一般の人にも聞いて早分りのするやう、處々省略若しくは敷衍して、泰西の趣味を東洋化し、彼れの金石を我が瓦礫となしたる罪大なり。

土肥の翻訳は磯辺のそれが研究成果としての性格を持っていたのとは全く異なり、エンターテインメントである演劇を目的とした翻訳である。「はしがき」には演劇上の効果や観客の理解のために作品を日本化するというストラテジーが明記されている。この点で、土肥の翻訳は明治 20 年以前の自由訳の流れを踏襲している。しかし土肥は同

時にこのストラテジーが「罪大」なるものだとも認めている。つまり、翻訳によって英文学の「金石」を日本化するべきではないということだ。ここには正確な鑑賞を目的とする英文学研究と、役者や観客を顧慮すべき芝居の実践との間にある翻訳のジレンマが示されている。

ここで想起したいのは、前節で言及した明治 19 年頃の演劇改良運動である。日本の演劇を西洋に倣って改良すべきという考えは、まさに明治日本の西洋化というイデオロギーを体現している。ただ、この当時の改良運動は具体的な部分では非常に曖昧で、『倭錦絵』や『何桜』に見られたように、西欧の思想や趣向を入れさえすれば日本風に翻案することは全く厭わないという姿勢であった。それから 20 年近くが経過して発表された土肥の翻訳が示すのは、単に闇雲に西洋の演劇のエッセンスだけを取り入れようとする 20 年前の態度を既に脱し、上演のための利益と英文学を忠実に鑑賞するための利益とが並置されて考えられる段階に来ているということである。明治 39 年には英文学者としての経歴を積んだ坪内逍遙を中心とした文芸協会が設立されるが、文芸協会が目指したのは、まさしく両者のジレンマをなくし、真に西洋演劇を日本に根付かせることではなかったか。

次に、明治 39 年には浅野馮虚がシェイクスピアの原文から翻訳した『ヴェニスの商人』がある。浅野馮虚は東京帝国大学英文科を卒業後、海軍機関学校の英語学教授になり、英文学研究に携わった人物である。

浅野による「序」は非常に興味深い。というのは、この序文は様々な立場の人が(埋葬されているストラトフォードの教会から抜け出してきたシェイクスピアの亡霊までも含めて)一同に会して、この浅野の翻訳について是非を議論するという体裁を取っている。浅野はそれぞれの立場の人間にどのような翻訳観を語らせているのだろうか。言及されているいくつかの立場からの翻訳観を要約する。

- ・英學者「翻訳の第一の要義は一字一句忠実に原作の意味を伝えることである。原文と似てもにつかない翻訳が最近流行しているが、感心しない。」
- ・英學生「翻訳というのは、単なる訳文ではなく、原作を読む時の参考になるものであって欲しい」
- ・文士「英學者の意見は表面的。翻訳の最大の目的は、原文の妙味を日本語の文の上に伝えることである。形式よりは内容、字句よりは精神を重視するべき。翻訳は原文に従属するのではなく、独立的価値を持つ」

- ・小説愛読者「翻訳物はごつごつしていて読みにくく、面白くない。すらすら読めるものがない」
- ・評論家「シェイクスピアの作品は性格描写が最大の特長であって、それをどう伝えるかが翻訳の最も肝心な部分である」
- ・翻訳者「どの意見も全て尤も。返答は五、六年待っていただきたい」

明治 20 年前後に共存し始めた、自由訳か逐語訳かの二項対立がここでも見られてはいる（英學者・英學生／文士・小説愛読者）。しかし、その二項対立は以前ほど単純なものではない。逐語訳を求める姿勢は、原文を読み理解するのと同じ読解を翻訳にも求めており、さらに未来の英学者たる学生が言うように、翻訳が原作の参考書になることが肝要なのである。この点で、磯辺の『講義録』と類似した翻訳に対する態度が見られる。この態度は、明治 20 年前後の逐語訳擁護が原文の忠実な理解だけを念頭に置いていたことからさらに一歩進み、英文学の教育と研究のためには（磯辺はこれが国のためになることだとも述べた）逐語訳であるべきだというのがこの時代の逐語訳観である。

一方自由訳擁護派も、20 年前後のようにとりあえず日本人読者が理解しやすいように、読みやすいように（小説愛読者）というだけの理由で自由訳を好んでいるだけではなく、「翻訳とは原文に従属するだけではない」（文士）という新たな翻訳観が登場していることは注目に値する。

そしてさらに興味深いのは評論家の意見である。翻訳のあり方と言うよりは、英文学の作品性ということに重点を置いて翻訳を見るのは、これまであまり見られていない観点である。

明治 8 年に *Hamlet* の話が読者に受けなかったことを考えれば、その 30 年あまりで、英文学作品についてここまで深化した議論ができるまでに日本の英文学研究と英文学受容は進化したのである。翻訳観も単なる二項対立から、その二項対立の内側に根拠の複数性が見られるようになっている。一般読者の翻訳評価、一般読者の現状を鑑みた翻訳態度と共通する学究的な英文学研究者による翻訳態度、英文学研究の制度的な確立、翻訳そのものの多様性を持つ発展。浅野馮虚による「序」は、この一連の英文学と翻訳の流れを浮き彫りにしていると言えるだろう。

### 3．まとめ

本研究ノートでは、明治を前半と後半に分けて、英文学とその翻訳がどのように関

連し合いながら発展してきたのかを通時的に概観した。

明治前半の英文学翻訳は一般読者の翻訳受容の現状が出发点となり、エンターテイメント性の強い翻訳も学究的な英文学研究を背景に持つ翻訳も、かなり大胆な自由訳を通じて英文学の翻訳が日本文化に受け入れられる土壌を作ってきた。

第1章では、明治期は英文学研究の発展と翻訳の発展が並行していたという仮説を提示していたが、考察を進めるに当たり、明治前半は両者が並行していたのではなく、読者の現状に鑑みた翻訳が学究的に英文学研究に基づく翻訳をも牽引してきたことが明らかになった。

明治後半になると、英文学研究の確立、翻訳状況の多様化・複雑化が背景となり、この頃から英文学研究と翻訳が並行して相関性を持ちながら発展していくことが確認できた。

明治の英文学翻訳と英文学研究の連関はある程度明らかにできたが、両者を取り囲む社会的・文化的なイデオロギーや背景との関連については、今回は体系的に示すことができなかった。

今後、明治末期から大正にかけて英文学研究が確固たるものとして発展していく状況や、昭和前期の英文学研究の隆盛、戦後の新たな研究制度の確立といった英文学研究の変化と、英文学翻訳がいかに相関するのか、考察を進めていく。又、本稿では具体的に検討しなかったが、翻訳はどうあるべきと考えられていたかを示すとされる翻訳規範論（Tourey 1995; Chesterman 1997）を用いて、翻訳と英文学研究制度、そしてそれらを取り巻く社会のイデオロギーとの相関関係を明らかにすることが今後の研究課題である。

## 【註】

<sup>1</sup> 帝国大学の設立が近代化と西洋化を目指した国のイデオロギーを体現したものであることは、鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社 1998）pp.179-90で指摘されている。

<sup>2</sup> 土井光知他監修『日本の英学 100 年 明治編』（研究社 1968）p. 24.

<sup>3</sup> 日本最初の英文学の翻訳は、デフォーの *Robinson Crusoe* の翻訳『魯敏遜漂行紀略』（安政 4 年 / 1857 年）、（『日本の英学 100 年 明治編』pp. 211.）

<sup>4</sup> 川戸道昭『明治のシェイクスピア』（大空社 2004）p.18.

<sup>5</sup> 川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア図絵』（大空社 2004）p.171

<sup>6</sup> 『明治のシェイクスピア』p. 90.

<sup>7</sup> 蛇足ながら、明六社とは森有礼や福沢諭吉、『西国立志編』の中村正直らを中心とする学術団体。明治 6 年に結成し、8 年まで『明六雑誌』を刊行した。

<sup>8</sup> 前田愛『近代読者の成立』（岩波書店 1973/2001）pp.148-9.

<sup>9</sup> 実際には『葉武列士倭錦絵』は1991年まで上演されなかった。

<sup>10</sup> 河竹繁俊『新劇運動の黎明期』(雄山閣 1947)

<sup>11</sup> 「肉一片」とは*The Merchant of Venice* のこと。シャイロックが借金のかたにアントニーの胸肉1ポンドをもらい受けると主張した有名な裁判の場面から。

<sup>12</sup> 「正本」とは歌舞伎や浄瑠璃の台本のこと。院本。

<sup>13</sup> 川戸前掲書 pp.166-7

<sup>14</sup> ホートンの講義については上野(1988)や川戸(前掲書)に詳しい。川戸はホートンの出題した試験問題を紹介しているが、ハムレットと母やオフィーリアとの関係、ポローニウスとレアティーズの性格を論じよ、など、かなり深く読解することを求めた問題になっている。(川戸前掲書 p. 102)

<sup>15</sup> 『日本の英学 100 年 明治編』pp. 213-4 で、吉武好孝が明治 11 年から 20 年までの間に出版された翻訳をリストアップしている

<sup>16</sup> 吉武好孝「翻訳・翻案文学」(『日本の英学 100 年 明治編』pp.214-5) Kondo and Wakabayashi, 'Japanese tradition' in Baker (ed.) *Encyclopedia of Translation Studies* (London: Routledge, 1998)p.489

<sup>17</sup> 吉武前掲書 pp. 130-1, p.213.

<sup>18</sup> 坪内逍遙「自分の翻訳に就いて」(1928) (『シェークスピア研究叢』新樹社 1959)

<sup>19</sup> 川戸前掲書 pp.16-26 では、逍遙の翻訳が 17 年、魯文の改訳が 19 年であることから、魯文が気鋭の文学者逍遙の翻訳ストラテジーを踏襲することによって以前は中絶した『葉武列士』を復活させたと論じているが、私はむしろ、魯文も逍遙も同様に、当時の自由訳ブームの中で、日本人読者に提供して成功するのは大胆な自由訳であると判断したのではないかと考えている。

<sup>20</sup> 『日本の英学 100 年 明治編』pp. 215-6.

<sup>21</sup> 『繫思談』を契機として明治の翻訳状況に変化が訪れたことは、上記の吉武(1968)や Kondo and Kondo and Wakabayashi (1998)にも指摘されている。

<sup>22</sup> 森田思軒「翻訳の心得」(『根岸派文学集』)

<sup>23</sup> 『日本の英学 100 年 明治編』p.424